
押入れ少女はラノベの世界に憧れている(仮)

=Bad.jp

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押入れ少女はラノベの世界に憧れている（仮）

【Nコード】

N3983BA

【作者名】

||Bad.jp

【あらすじ】

とある男性と少女の本屋で働く物語。

「ただいまー」

玄関を開け6畳とキッチン、トイレとお風呂といった一般的に充実した家に帰り着く。その声に反応して奥のほうから幼い声が返ってきた。

「おかえりー」

奥のほうからといってもさほど大きくない声ではあったが耳を澄ませれば聞き取れる範囲の音。男性は買い物袋をキッチンへと運び6畳の部屋へと入るがそこに先ほど聞こえてきた幼い声の主はそこにはいなかった。

部屋の蛍光灯に電気を入れ明るくすると同時に何処かで天井に何かをぶつけるような音がした、しかもかなり鈍い音。男性は押入れのほうを向き一言それに呟く。

「大丈夫かドラ。もん？」

「誰がド。えもんだ!？」

怒っているような声はどうやら押入れの中から言っているようだ。押入れの中に入っている? 女性はたぶん頭を天井にぶつけたのだろうか、鼻を齧るような音が漏れていた。男性は笑みを零しながらテレビを点け再び押入れへと目を向け一言。

「今日の晩飯何がいい？」

「ラノベ」

「いや、それ食べ物じゃねーから」

「じゃあ何があるの？」

淡々と女性は男性に質問をした。男性はその質問に答えられるほどの材料は買ってきてはいなかった。正確には買えなかったと言えばよいのだろうか。

遅めに仕事が終わりで急いでスーパーに駆け込んだがそこには値引きシールが貼られている商品は無くしかたなくカップラーメンやインスタント系を籠に入れ購入した。

苦し紛れでもパスタ！と豪華な物を言っしまえば多分彼女はそれでいいと返ってくるに違いない。いや、絶対そという答えが返ってくる。

数年ぐらい一緒に生活していればお互いの性格や趣味など数え切れないほど浮かび上がってくるものだ。そして、勘違いしてほしくないのだが決して彼女は付き合っている仲ではない。確かに一緒に住んでいるが一言で説明するのは難しい話ではあるが強いて言うならば

彼女はゲシュタルト崩壊だから

いやいや、これはおかしい。日本語としても十分可笑しな文法であり友達に説明してもクエスチョンマークが返ってくるだけだろう。そもそも、ゲシュタルト崩壊なんて滅多に使われる言葉でもないし知っているほうが少ないぐらいだ！

ヘリング錯視やミュラー・リヤー錯視のほうはまだ聞いたことのある言葉であるだろう。

それにしても人間の脳とはすごいものだとか心配できる、今この状況で忘れていた言葉があった。

彼女は引き篋もりで幼馴染な関係

これだ、幼馴染。

例えるとこれだ、学校帰りに女友達と楽しく話しているとたまたまそこに自分の好きな子が現れてしまい彼女さん？可愛いわねと言われ必死に違うと言う位きよどってしまったらしい。

我ながら何と変な性格しているのだろうか…

「ねえ、何があるの？」

空想の世界を勝手に描いていたらその一言でバラバラに碎け散った。慌ててキツチンにある買い物袋を確認するが大した物は出てこなく男性は肩で深い溜息が漏れた。しかたなく買い物袋の上のほうにある未開封のラノベを手に取り部屋へと戻る。

蛍光灯を消し押入れの襖を開けるとパソコンとラノベの山がありその隅っこのほうにパソコンから放出される光で照らされている一人の少女がいた。黒い髪は伸びきって手にはラノベを手に入っていた。

「今日発売のラノベだ」

買い物袋から取り出したラノベを少女に渡す。それを凝視するように少女は表紙を見続け少し大きな声を上げる。

「これは『このラノベがすごい』の大賞のラノベではないか！」

「ああ、大賞だけあって売り切れ寸前だったんだぜ…」

「今夜のオカズはこれにしよう」

「待て、その発言だと変な人が不自然な捕らえ方するぞ」

「それはどういう意味だ？それにお前も不自然な捕らえ方したんじゃないのか？」

「それはあれだよ…あれ」

男性は言葉を濁しながら苦笑いをする。

お父さん、今年で21になる俺ですがこういう状況下でどう答えればいいのかわかりません。素直に言々と確実に蹴りかビンタが飛んでくることでしょう。だから俺は何も言わない事にします、これが最善の答えだと信じて

その場にいない父親との空想上の相談は少女の蹴りで目を覚ました。

「いつてえなおい！」

軽く吹き飛んだ男性は痛々しそうに手で腹を擦りながら起き上がった。

「ふん、お前が早く答えないからだぞ」

「だからそれはあれだあれ！」

「あれだとわからないだろうが、お前の脳のCPU腐っているのか？」

「俺の頭はパソコン部品じゃねーし正常だよ！腐ってもいないぞ！」

「だったら、早く答えてみる」

「そこまで言うんだったら答えてやるよ！今夜のオカズっていうのはな男性の…！」

数秒後、男性の頬にビンタをされたような模様が出来上がっていた。少女は顔を赤らめ男性を睨んでいる。

お父さん、黙秘は駄目だったよ、しかも最悪の想定蹴りとビンタ両方貰ってしまう結果になってしまって息子はすごく凹んでいます。

「変態！死ね！ロードローラーで踏み潰すぞ！」

「絶妙な所に。ヨ。ヨネタ入れてんじゃねーよ…」

男性はゆっくりと押入れの襖を占め再び蛍光灯を点ける。深呼吸し少女との争いで得たストレスを落ち着かせようとまた深呼吸をする。

「なあ」

「なんだ変態」

「変態つてお前…まあいいか、これから大事な話をするぞ」

「大事な話？ラノベ的に言つてこの場面は告白か？」

「されてーのか？」

「嫌」

何の迷いも無く少女は率直に答えてきた。

「そうだろうな、今月中に仕事を辞めようと思うんだ」

「そうか…」

「ん、反論はないのか？」

「別に？人生とは人それぞれだ、お前が何しようとは私はお前の人生に釘を打たない」

「ありがとう」

ありがとう、そんな言葉は部屋に響き渡ったような気がした。

数分間の静寂が訪れた。押入れからページを捲る音は聞こえないということは静かに待っているんだろつか。男性のこのあとの人生をどうするかを。

「本屋を立てようと思うんだ」

その言葉に釣られ勢いよく押入れの襖が開いた。が、数秒後DVDの巻き戻ししたかのように勢いよく閉まった。

「目がー…ゲシュタルト崩壊が起きる…」

言い忘れてた。

あいつは光を直接目に当たることゲシュタルト崩壊という心理学に出てくる現象が起きるらしい。実際どういものなのかわからないがとても世界が歪んで見えるらしい。

少女は今もなおもがいているのだろつか、押入れで何かにぶつかるような音が連発で聞こえてくる。

「大丈夫か？」

蛍光灯の電気を消し少女に話しかける。

「ああ、まだゲシュタルトだが大体大丈夫だが…本屋するのかわ？」

「ああ、ちなみにお前も働くんだったぞ」

「か弱い少女に働かせる気か？」

「蹴りやビンタしておいてその台詞はねーわ」

真夏の夜、静かに鳴く蝉を聞きながらまた静寂な世界になった。

半年前から決めていた計画であり必ず成功させたい計画でもある、なぜならこいつが引き籠もりになったのは俺に原因があるからだ。理由は話せば長くなるので省かせていただこうと思う。

押入れを見ながら男性は静かにありがとう、ときっと少女には聞こえない程度で呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3983ba/>

押入れ少女はラノベの世界に憧れている(仮)

2012年1月10日14時46分発行